

発達障害についての臨床心理学的研究：当事者研究の現象学的アプローチから

著者	渡邊 登至明
雑誌名	人権を考える
巻	20
ページ	123-144
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00007746/

発達障害についての臨床心理学的研究 —当事者研究の現象学的アプローチから—

外国語学部非常勤講師 渡邊登至明

問題意識と目的

発達障害と言われる人たちの増加が問題になってきている中で（たとえば杉山,2011）、臨床心理学の立場からの対人援助活動に携わる筆者としても、そのように感じられる実践場面は多い。こうした発達障害への理解と対応としては、生物学的観点や認知行動的観点による客観的な理解に基づく具体的な支援が主流だといえる（たとえば下山・辻井編,2014；辻井・村瀬編,2014）。しかしながら、それだけでは十分ではなく、発達障害と言われる人たちの主観的な心の世界に目を向ける必要があるように思われる。すなわち、発達障害の客観的で外的な行動面に注目するだけの理解や支援では、彼らの心が置き去りにされかねない。発達障害の主観的で内的な世界に目を向けることでこそ内実の伴った理解と支援に繋がるのであり、それがひいては彼らの人間存在としての本質の意味を見出すことにもなるのだと思われる。そこで今回は、発達障害（注1）について、事象の本質の意味に迫ることができる現象学的アプローチ（注2）を、特に当事者研究という分野（たとえば綾屋・熊谷,2008）における題材を通して採用することで、発達障害についての理解を深め、より良い支援について考えていくことにする。

事例の紹介

今回取り上げる事例は、多種多様な‘生きづらさ’をエピソードとして描いたアンソロジーである「エピソード教育臨床（大塚・遠藤,2014）」の第六章において、発達障害（アスペルガー症候群）当事者であり教育学系大学院

博士後期課程で当事者研究を行っていてもいる磯崎祐介氏（以下敬称略）が、周囲の人々を理解し障害者を受け入れる素地を作ることに寄与できるという考えのもと、当事者であればこそ語れる現実を具体的に論述したものである。

論述に至る背景については、次のとおりである。すなわち、まず、磯崎が社会に適応するにあたってどのような困難さや生きづらさを抱えているのかについて自分自身の経験に基づいて語り、その際に磯崎の語る内容でわからない部分については編著者である大塚が質問していくという、対話形式が行われた。次に、大塚が対話の録音から逐語録を作成し、「基準が自分自身であること」「靴への偏執的ともいえるこだわり」「特殊な知覚構造ゆえの生きづらさ」という3つのテーマを決定した。そして、磯崎は逐語録をもとに原稿を執筆し、彼独特の言葉の使い方や表現ゆえに分かりにくい部分については大塚が噛み砕いて最低限に修正した。以上のように作り出された論述が、今回取り上げる題材である。

では、この論述に沿って今回の論点である発達障害の本質的意味について見ていくために、以下に論述の抜粋・要約を示していく。

事例の概要

1. 基準

・基準の辞書的定義

→物事の基礎となるよりどころ。また、満たさねばならない一定の要件。

・発達障害の磯崎にとっての「基準」

→基準の概念が一般のものとは異なっている。

（…以下、具体例にて）

1.1.1. 「ご自由」な自動販売機と「不自由」な私との戦い①

- ・あるとき、携帯電話の修理のために立ち寄った店で。待合室で待つあいだ、部屋の自動販売機に関心が向いた。
- 自動販売機には、「ご自由にお飲みください」と書かれていた。
- ・‘常に自分は自由な存在である’と考えている磯崎。
- 「ご自由に」という言葉が非常に魅力的だった。しかし、「ご自由に」とはどこまでが「ご自由」でありどこからが不自由なのか?!という疑問が生じた。
- 結果、「ご自由に」に関する疑問に囚われた磯崎自身が不自由な状態に陥ってしまった。

1.1.2. 「ご自由」な自動販売機と「不自由」な私との戦い②

- ・「不自由な私VSご自由な自動販売機」の戦いが開始された。
- なぜなら、磯崎が自身の自由を取り戻すためには、自動販売機の中の飲み物をすべて飲み干してしまい、自動販売機の「ご自由」を克服しなければならない、から。
- 自動販売機の「ご自由」が終わる状態としての「不自由」=自動販売機の中の飲み物がカラになって停止する状態。

1.1.3. 「ご自由」な自動販売機と「不自由」な私との戦い③

- ・夏の時期、身体的に冷たいモノを欲していたことから、磯崎はアイスコーヒーとの戦いをまず始めた。
- 磯崎はアイスコーヒーのボタンを押しては飲み干し、押しては飲み干し、を繰り返した。
- 周囲から見れば滑稽な光景も、「ご自由」な自動販売機に勝利し「不自由な自己」を克服するためには必要な行為。

- ・戦いは、磯崎の体調不良によって終わりを迎えた。
- アイスコーヒーの飲みすぎによって具合が悪くなった＝磯崎の自由は自動販売機に奪われたままに。
- 「私の自由って何？」にたいする答え（＝自由の基準）を与えることもできなかった。

1.2.1. 「前回の私」と「今回の私」との戦いへの変換①

- ・戦いはこれで終わりではない。
- 磯崎自身の自由を取り戻すためには、体調を万全にし自動販売機に再度戦いを挑む必要がある。
- ・一方で、いろいろな考えから疑問が生じた。
- この世のアイスコーヒーが全てなくなると勝利はないのでは？しかし自動販売機の中のアイスコーヒーはなくなれば追加されるため勝利するのは無理なのでは？。
- ・そうするうちに、変換作業が行われた。
- 自動販売機に自分が勝つことではなく、自分が自分に勝つことでこの戦いは完結する、というように。
- ex.今回は15杯飲めたから次回は20杯飲むことにより「前回の私」には勝利している。

1.2.2. 「前回の私」と「今回の私」との戦いへの変換②

- ・自分自身との戦いも大変なものであった。
- つねに自分自身が基準となっているので、今回の私が前回の私に勝ち続けるという形で、基準が毎回更新され続けるから。
- 自分自身との戦いも、自動販売機との戦いと同じく、終わりがなかった。

- ・自分自身との戦いも、磯崎の体調不良によって終わりを迎えた。
- 水分を大量に取りすぎることによる身体的な不調という形で。

1.3.1. 「ご自由」なポケットティッシュとの戦いと敗北①

- ・ある貸金業者の店舗に、ポケットティッシュが並べて置いてあった。
- そこにも「ご自由にお取りください」と書いてあった。
- ・「ご自由」な状態から不自由な状態へ。
- 磯崎は、当初は指示に従い、「2, 3個もらえば十分だろう」と片手に収まる程度で「ご自由に」頂いていた。
- しかし、「ご自由にとは、どのくらいがご自由なの？」と考えてしまって以降、1回目より2回目、2回目より3回目と、より多く貰わざるを得なくなった。
- さらに、新しく追加され続けることから、「いつなくなるの？、これではご自由にお取りしていた自分が不自由になっているだけだ！」と気づいた。

1.3.2. 「ご自由」なポケットティッシュとの戦いと敗北②

- ・ポケットティッシュとの戦いの特徴
- 自動販売機のアイスコーヒーとの戦いの場合とは異なり、ポケットティッシュはいくら取っても身体不調にはならないので、「いつかはポケットティッシュがなくなる時が来るのではないか？ =いつかは私に自由が与えられる！」と考えられた。
- 磯崎は、片手に収まる程度に始まり、持ち帰る数を徐々に増やしていったが、すると、持ち帰るポケットティッシュから「いつまでもなくなるよ〜！」と訴えかけられているかのように焦燥感が生じるようにもなった。

1.3.3. 「ご自由」なポケットティッシュとの戦いと敗北③

- ・ここでも変換作業が行われた。
- ポケットティッシュのご自由を克服し自らの不自由を自由にすることは、この世のポケットティッシュがなくなる限り無理ではないか？。
- ポケットティッシュとの戦いが、自動販売機の時と同様、「前回の私」と「今回の私」との戦いへと変換された。

1.3.4. 「ご自由」なポケットティッシュとの戦いと敗北④

- ・戦いは、磯崎の精神不調によって終わった。
- 自分自身との戦いに変換されても、ポケットティッシュとの戦いでは、身体不調によっては終わりを迎えることはない。次第に磯崎は、「なんで取らなければならないんだ？」「いつまで続けなきゃいけないんだ！」と強い苛立ちを覚えるようになっていった。
- あるとき、「もっと多くを持ち帰らなければならない」と前回の私が今回の私を脅している構図に気がつき、ポケットティッシュとの戦いを終えることにした。
- ・戦いの終え方。
- 台に置かれているティッシュを全て取り、空っぽになった台を目に焼き付け、「もう二度と来ない」と決意。

1.4.1. 自分自身が基準であるつらさ①

- ・一般的な場合
- 「基準」なるものは自分の外部にあり、ある程度は他者と共有されうる。
- ex.ゆえに、一般の人々は、「ご自由に」という表現を前にして、自動販売機・

ポケットティッシュ・自分などと戦わなくてもすむ。

1.4.2.自分自身が基準であるつらさ②

・磯崎の場合：一般的な基準を把握することができない。

①一般の人々のように基準が外部にありそれを他者と共有するという仕方ができず、基準が常に自分自身。

②基準がつねに内部＝自分自身であるが、自分は（そもそも／一般的な基準が把握できないからこそ現実世界にその都度自分なりに適応するために必要なこととして）常に変化し更新され続けるので、「今現在の自分が最も最適な基準」となり、ある時点での自分基準を固定化できない。結果、妥当な判断というのも常に流動的。

→ex.ゆえに、ご自由に持ち帰るべきポケットティッシュは回を追うごとに増え、原理的に終わらない。

→これは、「磯崎とはこういう人間」と単純に言えず、自分自身の存在の確保・自己の固定化が困難にも繋がる。

2.こだわり

・アスペルガー症候群における「こだわり」

→一般的には：興味の対象に対するきわめて強い偏執的ともいえる集中を伴う事態。

→磯崎の場合：「靴」がこだわりの対象だった。

2.1.1.共鳴し合う靴と私①

・こだわりの対象としての「靴」

→一般的には：履くものであり、実用性を伴ったもの。

→磯崎の場合：履くものではなく、「存在を共有する存在者」（要は、自分の部屋で共存したい者）のこと。

→磯崎の靴への思いは本人にとっては当たり前のことだが、他者とこの価値観を共有することはきわめて困難、と自覚もある。

2.1.2.共鳴し合う靴と私②

・共鳴する靴が目に入ると。

→一気にまわりが真っ暗になる。

→ほかの靴の中でもその靴しか見えなくなる。

→自分自身をコントロールすることが難しくなる。

→気もそぞろになり、息も上がり、手は震え、大汗をかき、自分が自分でなくなるほどに興奮する。

→すべてを持ち帰りたいので、また履くものではなく存在を共有するものなので、なによりもまず、（試着もせずに）在庫がどのくらいあるのかを店員に確認する。

2.1.3.共鳴し合う靴と私③

・「ぜんぶ買うかぜんぶ買わないか、どちらかの法則」

→ex.店に同じ靴が3つ並んでいる場合。磯崎にとってその中の1つを選んで買うことは、存在を共有できるはずの相手をその店に置いていくことを／「彼ら（ものではない）」を裏切ることを意味するので、できない。全部の靴を家に持ち帰れない場合には、「ひとつも（一足ではない）」購入しない。

- 磯崎にとっては、ある学校の生徒が一人一人違う人間でありながらも「○学校の子供」と集合体としてひとつにまとめられるように、靴も「彼ら全部でひとつ」として扱われる。
- この法則は、「靴という存在者」を尊重しているがゆえであり、自分のこだわりの原理だと、磯崎は考える。

2.1.4. 共鳴し合う靴と私④

- ・共鳴を受けた靴の在庫をすべて自宅に持ち帰り、存在を共有できた場合には。
- 「彼ら（靴）」が自分との存在共有を受け入れてくれ、「彼ら（靴）」の今後の存在の管理を自分が任されることになる、と磯崎は考える。

2.1.5. 共鳴し合う靴と私⑤

- ・「自分の履けるサイズ未満の靴は絶対に購入しない。他方、上限は何センチでも可能」というルール。
- このルールは、靴は履くものではなく存在共有者であるという表現と、磯崎の中では矛盾しない。
- 磯崎にとって、自分が履けない靴は自分と存在する世界がまったく違い・異なった世界観を有しており・存在を共有することができないから。
- 自分が履けない靴 = 自分と存在を共有できない = 靴ではない、の論理。

2.2.1. 美と美の共鳴①

- ・「いったい私はどのようにして彼ら（靴）と共鳴できているのか？」

- 彼ら（靴）のフォルムを確認し、自分の「美」の基準と一致した場合にのみ彼ら（靴）を購入していたことから、彼ら（靴）のフォルムの美しさに共鳴を受けたことはまちがいない。
- 磯崎にとってこれは、自分の「美」の基準と靴に備わる「美」の両者の共鳴に基づいて存在を共有することを彼ら（靴）と契約する行為、を意味する。

2.2.2.美と美の共鳴②

- ・そもそも、「彼ら（靴）に対して自分が感じている「美」とは何か？」
- 磯崎にとってそれは、彼ら（靴）によって限りなく誘発されるものであり、理由がなく惹かれるものである。そして、自分にここまで汗をかかせるのだから、彼ら（靴）もまた自分との存在共有を望んでいるのではないか？、つまり彼ら（靴）という存在者が私という存在者を能動的に認めているのではないか？、という考えに導かれる。

2.2.3.美と美の共鳴③

- ・「美と美の共鳴」関係についての結論。
- 磯崎にとって、（自分が靴に惹かれること＝靴が自分を能動的に認めていること、という前提を踏まえて）靴から自分の存在を認められることは、自分の主観が限りなく侵食される（自分がなくなってしまう程に強く興奮する）経験。こうした中で、「彼ら（靴）が欲しい、存在共有したい」と非常に強く思い、自分の最高の能動性の発揮として今度は彼ら（靴）を購入し、彼ら（靴）の存在を自分が把握する。つまり、自分が靴に惹かれると同時に靴も自分に惹かれることで、互いに侵食し合う関係が結ばれる。これが、美と美の共鳴関係。

2.3.1.存在共有の在り方①

・靴へのこだわりの現在。

→200足以上の靴と存在を共有している。広くない部屋の中で、彼ら（靴）を尊重しつつ、フォルムを崩さないように箱に入れた状態で共存しなければならない。

→困難ではあるが、彼ら（靴）を尊重した‘収納’ができています。

→靴と出会い、互いに強く惹かれ合い、自宅に持ち帰って美しく収納するという形で、彼ら（靴）と存在共有をしつづけ合い、共鳴しつづけ合う、これが磯崎にとっての「究極の美」を追求した結果。

2.3.2.存在共有の在り方②

・現在のこだわりの対象。

→靴だけが磯崎にとって唯一無二の存在者なわけではない。

→靴との関係は流動的なものであり、「美」の対象は時間の経過とともにほかの存在者へと移っていく。

→現在、美と美の共鳴によって存在共有が可能になっているのは、「バッグ」である。

2.3.3.存在共有の在り方③

・磯崎と存在者との関係における注意点。

→磯崎は、人間同士の一夫一婦制に基づく婚姻関係と同じく、一対一対応によってお互いの存在を尊重する必要がある。こだわりという「究極の美」を追求していくためには、「私-靴」「私-バッグ」といった徹底した一対一対応の関係が必要、と考える。

→このため、現在では、靴は部屋の中でキレイに収納されてはいるが、これ以上増えることはない。

3.知覚

・一般的な「知覚」

→視覚・聴覚・嗅覚などの感覚受容器をとおして、外界からの刺激を意味付けること。

・磯崎（アスペルガー症候群）における「知覚」

→一般とはいささか異なり特殊な知覚構造を備えているため、日常生活でしばしば生きづらさを経験する。

→ex.人間の声を聴くとその内容が映像として視界に浮かんでくる。

→生きづらさが顕在化するのが、「大学の講義」。

3.1.1.複数の教授法にまつわる困難①

・磯崎が大学生の時に受講した「心理学」の有り様

→レジュメ、パワポ資料、板書、教員の発話、映像資料、などの教授法が駆使されていた。

・磯崎の有り様

→自分自身が行為や判断の「基準」であり、外部対象に脅かされることなく常に「自由」でなければならない。

→ex.ご自由な‘自動販売機’にも、ご自由な‘ポケットティッシュ’にも、‘前回の自分自身’にも、勝ち続けなければならない。大学の講義でも同様に、すべての内容を把握し理解しなければ気がすまない。

・大学講義における普段の磯崎の様子。

→内容を把握し理解するためにできる限りノートを詳細に取り、ノートが

真っ黒になるほど。

3.1.2.複数の教授法にまつわる困難②

・「心理学」の講義では。

- 複数の教授法が駆使されつつそれらの組み合わせによって1つの事柄が説明されていたため、同じ事柄についてさまざまな媒体を用いて説明されることになった磯崎は、情報過多・情報飽和に陥ってしまい、1つ1つの媒体に対応することで精一杯。
- さらに、レジュメ以外は提示されるだけで説明がなく、教員はパワポや板書をノートにメモするのに十分な時間を確保しなかったため、磯崎はすべての内容をノートに記すこともできず、次々に情報が展開していく中で、展開の意味や講義内容の理解ができないまま、次への展開に恐怖を感じながらひたすらノートを取り続けるしかなかった。

3.2.1.自己の固定化①

・「心理学」講義への磯崎の対策

- もれなくノートを取り、わからないことは授業後にすべて聞きに行く。
- とくにノートをとることについては、授業前には精神的シミュレーションを行い、静かな場所で「自己の固定化」（「アクション」「スタート」といったキーワードを心の中で唱えることでひたすらノートをとることのできる状態になること）へ。

3.2.2.自己の固定化②

・生きるか死ぬかの戦い

→「心理学」受講への準備をしても、さまざまな教授法ゆえに磯崎は情報過多に陥り、自己の固定化が脆くなってしまふ。そうなる、わからないことを聞きに行くことは可能なのか？との恐怖に襲われることになり、それにより事前に準備していた自己の固定化がさらに崩れ、結果、ノートをとることが益々難しくなる（悪循環）。

3.3.1.聴覚情報の視覚情報への還元①

・聴覚情報の視覚情報への還元とは。

→人間の声を聴くとその内容が映像化されて浮かんでしまうこと。

→ex.教員が「赤ちゃんが…」と述べると、赤ちゃんの映像が視野のどこかに浮かんでしまう。それを見ている磯崎は視点が定まらず、教員から注意されることもしばしば。

→こうしたことも、磯崎が講義内容を十分に理解することを妨げた。

3.3.2.聴覚情報の視覚情報への還元②

・聴覚情報以外の視覚情報への還元

→映像化されるのは、教員の発話だけではなかった。

→ex.パワポスライドの内容、レジュメの内容、それらから喚起される自分自身の思考内容、のすべて。

→聞こえてくる内容だけでなく目に映る文字や自分の思考内容が次々と映像化されることで、そちらに注意が向いてしまい、益々ノートをとることが困難に。そうならないための対策としても、「自己の固定化」は必要。

3.4.1.映像から創りだされるストーリー①

- ・視覚情報への還元から、自己の世界観の展開へ。
- 複数の情報が与えられると、内容から呼び起こされる映像が成長し、固有のストーリーが創り出される。
- ex.教員が「臨界期がお年寄りになると…」と発話。同時に、磯崎には老人ホームの様子が映像化される。
- ex.さらに教員が「臨界期には自己受容が大切…」と発話。老人ホームの映像を見ている磯崎には、「老人ホームは臨界期になって自己受容が必要な人のためにあるんだ、有意義なんだろうか…」と思考と映像が展開。
- ex.さらには、「リンカイ」という言葉の響きから、波打つ海の映像や「海に行ってみたいな」と思考が展開。同時に、「海は広いな～」の歌が頭の中で流れ出す、ある映画での海の場面の映像が浮かぶ、など。

3.4.2.映像から創りだされるストーリー②

- ・固有のストーリーが創り出されることの問題点。
- 磯崎の中で独自のストーリーが展開していくと、授業とはまったく関係のない思考内容となり、教員の発話はほとんど聞こえなくなる。気が付くと、授業が先に進んでいることに気が付く。
- 講義中の磯崎の関心の変遷は、「講義」～「自分の作り出したストーリー」～「講義」～「自分の作り出したストーリー」。
- 自らの関心が講義内容から自分で作り出したストーリーに向かってしまうたびに講義理解は中断され、講義内容を断片的にしか認識できなくなる。

3.5.1.講義を受けることによる成長①

- ・磯崎にとって、大学での受講は大変な努力を要した。
- この文章を書き続けること自体も、大変な作業。
- 当時の記憶がありありと甦ってくる、文章がその都度映像化される、当時の恐怖感がありありとこみ上げてくる、など。
- ・大変な受講体験も、回を重ねると、パターンを覚えられるようになった。
- さまざまな教授法が駆使されても、磯崎自身が固定化された自己として受講可能に。
- 自分自身の知覚構造をコントロール可能となり、優先順位をつけながら行為することも可能に。

3.5.2.講義を受けることによる成長②

- ・磯崎による「自己の成長」に関する考察
- 自分が成長した理由は、自己認識さえもあやふやになるような困難な経験を克服することで、生きていくことのスキルが身に付いたから。
- 自分の成長の特徴は、すべての基準としての自分が現実世界にその都度適応するためにも自分の中の基準を更新し続けていることから、さまざまな経験を重ねるたびに通常の学生よりもより適切・深く学習し自分のものにするのが可能だから。
- いずれにしろ、自己管理の方法を学べた「心理学」の講義には、今では感謝している。

4.まとめ

- ・本質的な支援とは。
- 発達障害の当事者が生きている現実は、「生きづらさ」を超越した「生きることの戦い」、すなわち「生きづらさの継続」。

- 「生きづらさの継続」を無理にやめさせるよりも、当事者が納得できる形で生き続けることを支えていくこと。
- ・インフォームドコンセントの重要性
- 一般の人々と発達障害の人々との間で、(当事者が)正しく説明を受けて自らの意思でその説明に同意するという関わり方が周囲の人々との間で適切に営まれること。
- これにより、発達障害当事者の自己意識がより確実な認識として深化していく。
- さらに、他者が支援するのは別のやり方で、当事者自身が自分の生きられる・生きやすい環境を自らの力で広げていけるようになる。

5.おわりに

- ・今回のインタビューによる、磯崎にとっての収穫。
- 大塚と対話を重ねたことは、インフォームドコンセントの実践といえた。
- 自己理解が深まり、自分自身の基準が更新されていく体験となった。
- 誰かと一緒にいること、対話すること、を身を持って学ぶことができた。
- 「生きづらい自分」についての理解と同時に、自分の特殊性・面白さにも気づけた。…より生きやすくなった。
- 自分の経験をもっと表現したい、もっと挑戦したい、と思えるようになった。

考察

以上に、発達障害当事者である磯崎による論述を要約・抜粋した。発達障害の特徴を理解するといえ、通常であればたとえば、Wing,L. (1996久保・佐々木・清水監訳1998)による仮説である「自閉症の三つ組みの障害」、すなわち‘対人関係（社会的相互作用）の障害’‘コミュニケーションの障害’‘イマジネーションの障害’といった枠組みが当てはめられるのであろうと思われる。しかしながら、そうした枠組みとは別に、今回の当事者による事例に示された具体的で詳細な内容にありのままに触れることで、発達障害のよりいっそうの深みを持った本質的意味が新たに浮かび上がってくると思われる。すなわちそれは、‘ほどほど・いいかげんにできないこと’および‘類推的思考ができないこと（それゆえにまとめることや応用することが困難であること）’の二点である。そして、これらについては、英国の対象関係論的精神分析家であるWinnicott,D.W.による「移行対象論」（1971橋本訳1979）に基づく「関係性」（川上,2012）という議論が、発達障害の本質的意味についてのさらなる深い把握だけでなく、そこからのより効果的な対応が見いだされる可能性が開かれるという点で非常に有益だと思われるので、以下に述べてみたい。

まず、‘ほどほど・いいかげんにできないこと’について述べるとすれば、それらは「関係性」の中でこそ得られるものであり、「関係性」の中でこそ求められるべきものである、ということが言えると思われる。すなわち、「関係性」においては自己と対象が存在しており、両者は分離・切断された別個の存在として客観的現実を共有しつつも、同時に一方では、両者が別々の存在であるという事実が曖昧にされる。そこでは思い込みや空想が作り出され、両者は1つのユニットとして機能する。なお、この思い込みや空想とは‘空気’‘気配’などと言われるところの‘気’をキャッチすることで作りだされるものである。そしてまた、これは当然のことながら、現実とは異なりほどほど・いいかげんなものでもある、というよりそうであることが期待される。従って、われわれは「関係性」の中でこそ、ほどほど・いいかげんにつ

いて教えられるのだともいえるのである。

そして、以上を踏まえて、今回の磯崎の論述に描かれているような「基準」の問題について言えば、「基準」は「関係性」の中で得られるもの・「関係性」の中に求められるものであり、「関係性」から外れたり「関係性」の外に探すと、磯崎の示すような生きづらさにつながってしまうのだと思われる。そして、さまざまな要因によって「関係性」における自己と対象とが分離・切断され、別々の個人でしかない、1つのユニットとして機能しない、そのような世界を経験しているのが発達障害なのであるということも言えるのではないかとと思われる。なお、今回の磯崎の論述において、たとえば‘自動販売機’との格闘場面において、磯崎も「関係性」における‘気’を感じ取っている様子は認められる。そうであれば、そこから思い込みや空想ひいては「関係性」に介入することを試みるのが、治療的支援に向けた工夫として導き出せると思われる。たとえば、「自動販売機‘さん’がね、…」などといった語りかけを行うことで、切断・分離されていない「関係性」の世界へのスイッチを学習させることができるのではないかと考えられる。そして、こうしたやりとりは、「関係性」の原点である幼少期の母子関係における営みを彷彿とさせるものであることは言うまでもない。

そして、‘類推的思考’についても、同様に考えることができると思われる。すなわち、「関係性」の原点である幼少期の親子関係を顧みれば、親は子に対して、「関係性」を基盤にしてそこで何十回何万回と同じことを言い聞かせて行く、そうした中でまとめるとか応用するといった機能が少しずつ立ちあがってくる。従って、何度も同じことを言い聞かせつづけることが、発達障害の治療的支援に向けた工夫として導かれてくるとと思われる。

なお、「関係性」の議論をさらに進めれば、現代社会というのが、「関係性」の原点である親子関係において、さらには日常的な様々な人間関係において、思い込みや空想の世界が大切にされずに現実的・客観的であり切断された個人対個人同士の関係がむき出しになっているという実態があるのではないかと、という想像が可能になってくるのではないかとと思われる。さらには、こうしたことが現代社会で発達障害が増加しているいくつかの要因のうちの

1つとなっている可能性について想像してみることも、臨床実践的には有益なところもあるのではないかと思われるのである（注3）。

まとめ

今回は、発達障害への理解と対応の現状に対する問題意識から、現象学的アプローチを採用し、特に当事者研究の題材を取り上げた。その結果、発達障害の本質的意味としての‘ほどほど・いいかげんにできないこと’および‘類推的思考ができないこと（それゆえにまとめることや応用することが困難であること）’の二点を取り上げることができた。さらに、Winnicott,D.W.による「移行対象論」および川上による「関係性」の議論を参照することにより、発達障害の本質的意味についてのさらなる深い把握が得られ、さらには治療的対応への工夫も見出すことができた。いずれにしろ、当事者研究に対する現象学的アプローチを採用することにより、発達障害の理解においても対応においても、関わる人すべてがより自然な形で接することができるための道が開かれて来るのではないかと思われる。

注1

精神疾患の診断によく用いられる基準としての「アメリカ精神医学会による精神疾患の診断と統計マニュアル（DSM）」によれば、第四版（DSMIV-TR）において自閉症やアスペルガー症候群を含む広汎性発達障害と呼ばれていたものが第五版（DSMV）においては自閉症スペクトラム障害とまとめられ、さらには注意欠陥多動性障害や学習障害などとともに神経発達障害群としてひとくくりになされたことから、多様な発達障害を大まかに「発達障害」として捉えていく方向性が示されているといえよう。

注2

現象学的アプローチとは何かに対する答えは各々の現象学者によってその内実は少

しずつ異なっており、また適用される学問分野においても少しずつ異なっており、必ずしも一様ではない。現象学を心理学研究に適用する現象学的心理学の分野においても、Langdridge,D. (2007田中・渡辺・植田2016訳)によれば、フッサールに基づくジオルジの記述的アプローチ、スミスやオズボーンの解釈学的アプローチおよびキングによる鋳型分析や、ガダマーやリクールに由来する批判的ナラティブ分析、といった主要なものだけでも3つのアプローチが存在するという。ここではそのような詳細には立ち入らず、自然科学が求めているような客観的な真理ではなく、より多くの人が納得できる意味・共通理解が可能な意味としての本質を求めめるための方法、という程度にしたい。

注3

同じような議論として、岡田(2012)は、現代社会における発達障害の増加について、それを生物学的な素質論だけでは説明しきれないとし、愛着障害という用語を用いて、増加要因の1つとしての親子関係の歪みという点に注意を促している。

引用文献

- American Psychiatric Association (2000) . *DSM-TR : Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 4th Edition, Text Revised*. American Psychiatric Association.
- American Psychiatric Association (2013) . *DSM-5 : Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th Edition*. American Psychiatric Association.
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎 (2008) . 発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつながりたい— シリーズケアをひらく 医学書院
- 磯崎祐介 (2014) . 当事者が語る生きづらさ 大塚類・遠藤野ゆり (編著) エピソード教育臨床—生きづらさを描く質的研究— (pp.143-168) 創元社
- 川上範夫 (2012) . ウニコットがひらく豊かな心理臨床—「ほどよい関係性」に基づく実践体験論— 明石書房
- Langdridge,D. (2007) *Phenomenological Psychology : Theory, Research, and Method*. Pearson Education. (ランドリッジ,D.田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子訳 (2016) . 現象学的心理学への招待—理論から具体的技法まで— 新曜社)

- 岡田尊司（2012）． 発達障害と呼ばないで 幻冬舎新書
- 下山晴彦・辻井正次（編）（2014）． 発達障害研究の最前線 臨床心理学, 14（3）．
金剛出版
- 杉山登志郎（2011）． 発達障害のいま 講談社現代新書
- 辻井正次・村瀬嘉代子（編）（2014）． 成人期の発達障害支援 臨床心理学, 14（5）．
金剛出版
- Wing,L.（1996）． *The Autistic Spectrum : A Guide for Parents and Professionals*.
New York : Constable.（ウイング,L.久保絃章・佐々木正美・清水康夫（監訳）1998
自閉症スペクトル—親と専門家のためのガイドブック 東京書籍）
- Winnicott,D.W.（1971）． *Playing and Reality*. London : Tavistock Publication.（ウイ
ニコット,D.W.橋本雅雄訳（1979）． 遊ぶことと現実 現代精神分析双書第二期第
四巻 岩崎学術出版社）